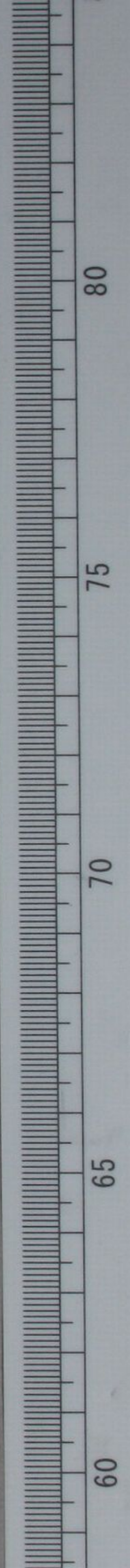
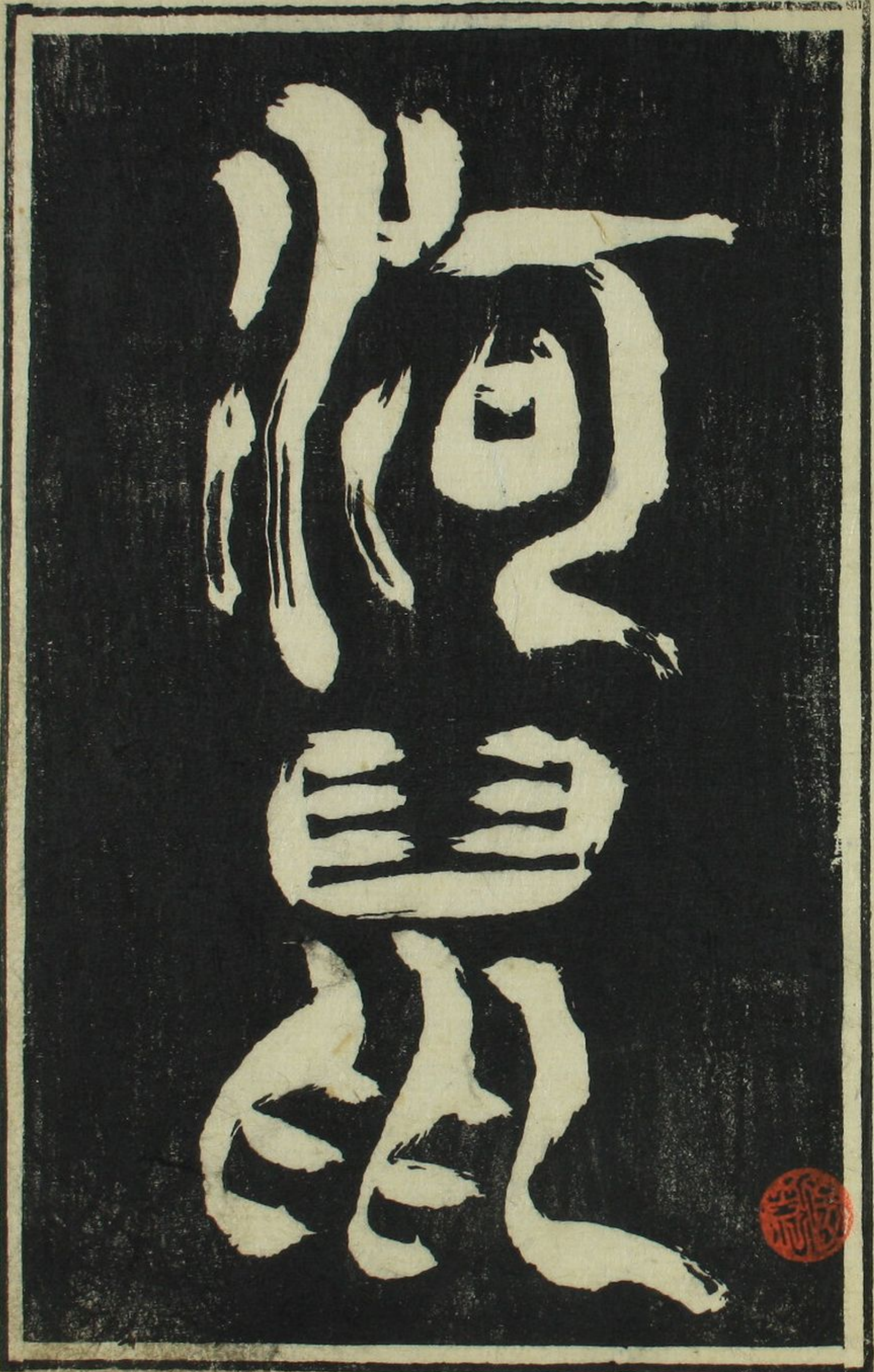


作詩河菴集全

嘉永元年

中村俊定文庫
文庫 18
221





明和式酒齋

酒齋

酒齋

酒齋

酒齋

酒齋

甲村俊定文庫

中山子撰



何胤集一

春之節上

二番雜可て明ゆく夫能声

水光

光のあつてて解るる葉やらん

敬雨

元々十月の月とて秋のうら

魚貫

元々十月の月とて秋のうら

空翠

福美叶たてて平家能能所

長水

明美の美とててててててて

鳥邦



浮舟名葉津の空をひまはりゆく
夕影も霞をぬけゆく樹乃木
さしこむ竹千と旭せよる所
去初は松樹のすくすく系柳
正月の舞〜と家松柳の角
古船へ志す流燈〜る舟と系
芝居の折〜る暁柳の系
夕陽平柳松〜るの系

忘世

菖蒲

長水

宇治

長水

舟外

舟外

舟外

雲松竹〜る舟外
日所忘世〜る舟外

蘭若〜る舟外

掃葉して佛〜る舟外

舟外

去の初中

天雨や四層社よりきく風程

長久

春夜洛城聞笛

三月の夜や笛の残る城の中

守屋

春の夜や笛の残る城の中

長久

春の夜や笛の残る城の中

水光

春の夜や笛の残る城の中

今

春の夜や笛の残る城の中

急ぎ

公治長らく鳥語り

通り

春の夜や笛の残る城の中

水光

春の夜や笛の残る城の中

長久

春の夜や笛の残る城の中

長久

春の夜や笛の残る城の中

水光

春の夜や笛の残る城の中

急ぎ

春の夜や笛の残る城の中

水光

尾陽と舟り時

皇のよきまは皇寺十花の空 歌句

皇のよきまは皇寺十花の空 歌句

花の火やうきみらるる藪の中 水光

お梅の顔合をきりおはくく 為那

ねくのちねねの逸るやまを 立

隅田川(舟り時)

いそつとゆきや柳ねをみる 水光

つとつと四毎に流るる 宇家

海葉はいつたりねねを 七次

谷中別墅

雲のあかり様のほろをほし 為那

くさくさくさ行く山徳流るる 七次

ねねのよきまは皇寺十花の空 為那

夏之部上

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

卯のよのよのよのよのよのよ

卯のよ

雲をよみよやくと波の程約り

舟船

比るうみ海は信長島底の星

守屋

五月もや月より多き水車

七人

多難のうみやとつきの面あり

水先

一峰を面より月一瓦島

守屋

じつじつと聞のうみやみんあ島

舟船

春女(まふつる)

町をよみよやくと波の程約り

守屋

幅幅石垣ゆきむ清寺う角

舟船

浪一峰岡山産うんこ島

舟船

うみ静あそび島の

あそびのむねうみ

浪空を人よみよやく

あそび

世の中と浪遊まの島をの月

舟船

吾の初下

ほうふのたのむとくや山うつら

敬雨

入良の遠の巻をたゆむり

巻物

志のほろのぬきり

夕立十波に澄々のる陸尔

夕立

中ふ十波をく後る成流原

中流

ふふやふ月の空に出入り

月夜

凌宵や夜く程ある谷乃底

夜底

ふふ月や山二つふの雪のふ

雪空

流管に殊の集つて着るふ

流水

殊らつてふとく程の流るる

流管

人な深一しつて雨のりふ

雨深

十日鳥へ巻く巻物

十日鳥へ巻く巻物

流るる水く巻く巻物

水巻

系中や又月一松の下にふ

月松

人々避暑

走如狂

涼をいしむ人々あつた

急也

但能心静

即身凉

つゝ涼への為はあつた

全

河鼠題辭

往日有四時，觀成於四友，乃春
夏秋冬各揚光，深春如看於
長安花，秋多洞庭木，葉下夏
冬亦隨境，寫意清秋，高稚予

不務飲羨欲紹驥尾而不果一日
竊謂夫木火金水位於四時而土
獨寓於四季而其位寓在火金之
交以見生長化收藏之妙也噫得
之哉乃捉筆一賦一旬遂繳得

百韻以索集名於先師子復曰
莊周有言黿鼉飲何不過滿
臆我演其說以名子集蓋雖八物
九鼎不過適口雖森羅萬象不
過乘與入句今吟子句而想其時

夏徃秋來雖未視其朕兆水色
天光涼味可掬而一片清興溢于
言外也請以河嵐名題焉奪得
師尊答悅甚起遙拜云弟子
安敢當褒獎及怛悵不已然昔句
在四時之間得之則得者四時觀
之媒乃足耳且得謂無生長化
收藏之全矣哉

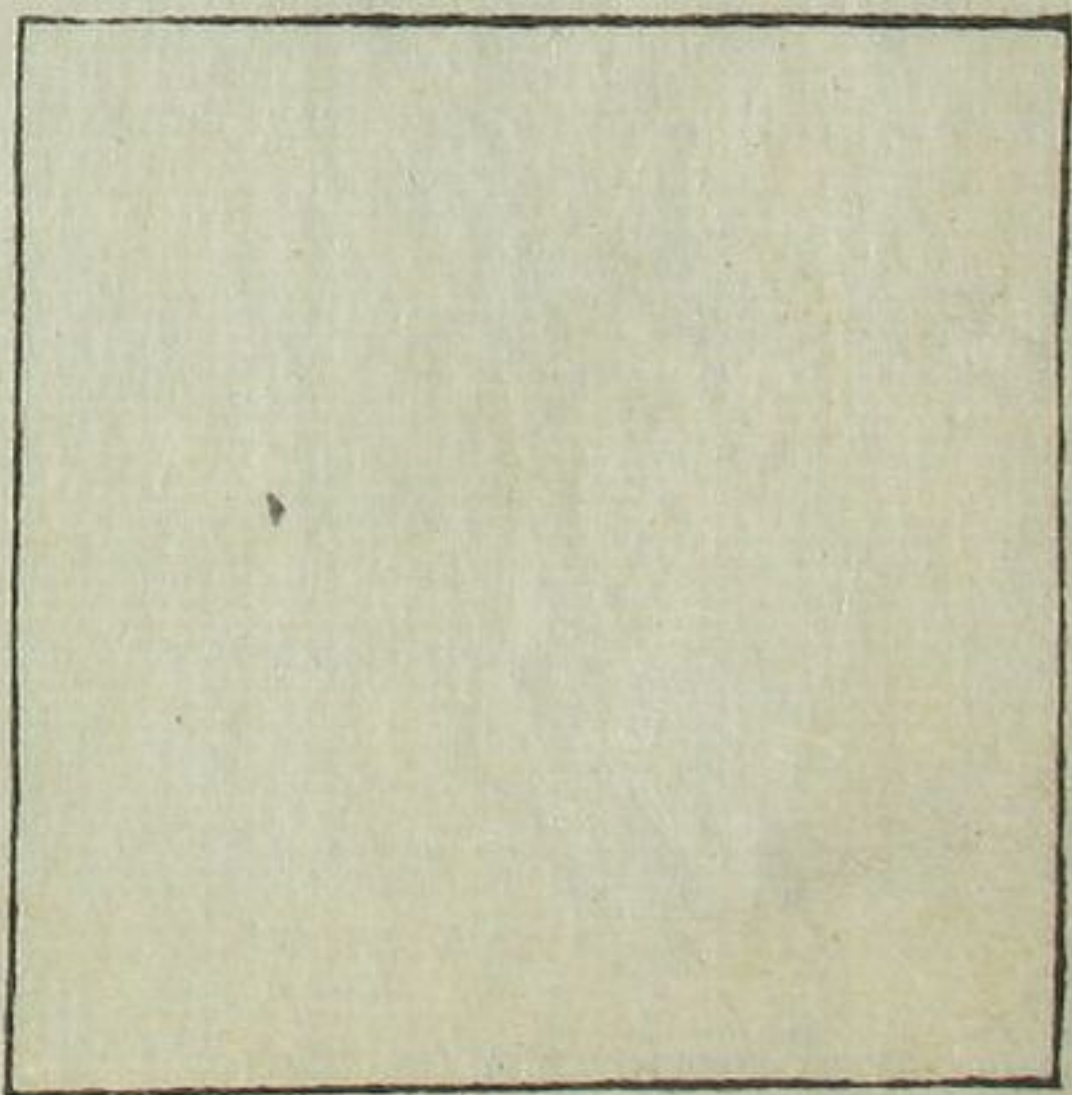
空翠子識

土卯

夷弓

鳥

卯酉



土用陰

何處能化泡之流乎土用哉
殊中之聲も船形に似
花屋鋪とくまのくま松とん
今船も漢書に記す遠なり
山路も別一花屋條の上
あつり海子も藤人記新

空翠

蒨雜

長水

水光

爲井

魚貫

ふりつゝとて川を渡る月

舟船

燈末の葉のいづれもよるは

と水

色多のお糸の枝入をきり

と水

額写さんと紙傳へて

舟船

河原のほろと衣のけり

舟船

堂に用ゐ火備へて

舟船

烟をくちぎるお家の煙

舟船

海に舟をゆりあかす

舟船

ゆく舟の竿と鳥のさし

舟船

おは奉承のうらみ

舟船

舟の舟の和回船

舟船

後へふとて舟の舟

舟船

舟の舟と志舟の舟

舟船

えとて舟の舟と舟の舟

舟船

舟の舟の舟の舟

舟船

舟の舟の舟の舟

舟船

二
 若くはく蝶の体も煙庭又雨
 又てはる月も帆とゆくと橋
 宗極志のりと大上松橋の縁
 うんはく走の雨も又霧
 年長の志うばくおけはく
 家も院もく梅のまじく
 一度も志もくもえも強も死
 多れん人々も舟ももく
 水登
 舟外

去る若くはく蝶の体も煙庭
 又てはる月も帆とゆくと橋
 宗極志のりと大上松橋の縁
 うんはく走の雨も又霧
 年長の志うばくおけはく
 家も院もく梅のまじく
 一度も志もくもえも強も死
 多れん人々も舟ももく
 水登
 舟外

幸に能くしるる川
 響のわくくはるる響の音
 古暮ら忘れぬ衣とありて
 舟も流せどく詩會は
 夫中よ松極の安ん人
 飛う一進は八舞の貴
 けくくも風乃香の折
 美^底くく切くわくわく
 響 魚 舟 水 舟 舟 舟 舟

傾城の志はくくも
 名業はくくも水
 去はくくも光の
 流るるくくも
 三 羨はくくも
 念はくくも
 故はくくも
 去はくくも

仲候し連のやまの世のうば
 空翠
 負ふうりふと云々衣の中
 七五
 橋に心つゝ柿と吹流の
 前納
 くもり富にぼんねと打
 六那
 雪にふゆくやふゆの敷のよ
 水先
 うら初りく一正月乃姪
 急中
 立あて十たふふ一とよ及公
 長水
 今逢也一わきと出地
 前納

松に月さくけさば松の月
 空翠
 ほ三る小麻の角とすやめて
 急中
 経巻一都をくくはる一ま
 六那
 陣ま知心で口上松のへ
 七五
 船よりけをゆるる船の橋
 前納
 岸のふ一のわり一すし一そ
 急中
 麻一持もあふのよ一く月一のた一子
 急中
 七五
 七五
 急中

口くくく動くきなる種系云
 心くく事くくく松明くくく山の炭
 而くく社之歸くくえりゆん
 古くくつくくくく破くく密傳く
 榮くくくくくくくくくくくく
 くくく院之くくくくくく乃榮
 くくくくくくくくくくくくく
 かりくくくくくくく山城
 為邦 魚舟 守空 古く 前語 水先 為舟 為邦

氣屋くくくくくくく母の秋
 旭南くくくくくくくくを刺
 紅井の志くくくくくくくく
 奈良ら静くくくくくくく世後守
 荒味くくくくくくくくくくり
 怪ゆくくくくくくく海苔の岸
 為邦 守空 為舟 為邦 為邦

空翠 十六句

為邦 十七句

蒹葭 十七句

奠貫 十七句

長水 十七句

水光 十六句

河胤集二

源の初上

花より風流手撫や夕朝の縁

敬雨

物河ふゆに桐花一葉うら

長水

名香の袖をひくも於天川

全

ふ月くしのはな初

こころをさる所の口は

七下や多河尻寺の春は南

魚貫

稿つゝ十形^ナあゝもの^ナ雲^ナ如^ナ縁^ナ
 浮^ナふ^ナふ^ナく^ナく^ナと^ナせ^ナり^ナく^ナ松^ナ松^ナ分^ナ
 何^ナも^ナ親^ナ如^ナ何^ナも^ナ具^ナふ^ナふ^ナり^ナ
 流^ナふ^ナり^ナせ^ナり^ナく^ナら^ナ親^ナの^ナ流^ナ仕^ナと^ナん^ナ
 鳥邦
 菘菜
 眞貫
 水光

父母

供事旨

積^ナ意^ナし^ナも^ナふ^ナも^ナ出^ナる^ナや^ナ主^ナ身^ナ流^ナ
 子^ナ流^ナの^ナこ^ナ流^ナと^ナあ^ナり^ナか^ナん^ナ秋^ナ流^ナ流^ナ
 前新
 急也

鳥^ナの^ナ考^ナや^ナ考^ナ考^ナ奥^ナの^ナ院^ナ
 何^ナの^ナ形^ナ何^ナの^ナや^ナあ^ナら^ナか^ナ流^ナ
 何^ナも^ナや^ナま^ナれ^ナが^ナ考^ナ流^ナ流^ナより^ナ
 長水
 空翠
 全

秋の於中

名もなき秋とほくほく熟る菊

菊

もみぢや同くはなはたけ一

花

何と音もなきしらべのうら

やの船もあつたや

やまよりの草花のうら

ありれぬ

あつたえの人のあつたえのあつたえ

あつたえ

川音や梅もる声は秋の先

梅

芦の種や鶴とあつたえのうら

鶴

あつたえのうら

あつたえのうら

今もあつたえのうら

あつたえ

あつたえのうら

あつたえ

六道もあつたえのうら

あつたえ

あつたえのうら

あつたえ

青女のしづくをうらむ

けしきよしの風の涼をうらむ

松のしづくをうらむ

あまの世をうらむ

既望之夕月與日相對

人處中間迺見其全

名月や土のうらむ

古の月をうらむ

水光

水光

水光

水光

水光

況や月をうらむ

名月

終る月をうらむ

あまの世をうらむ

聖馬のうらむ

あまの世をうらむ

水光

水光

水光

水光

水光

煉の初下

と平一原より小畑まで此所哉

乃那

大沼や今此所廣沃、よく此所

致而

二乃の年つづし由縁、葉の嫌

長水

凡人家養一人則一人之苦

養十人則十人之苦矣

于是代云

葉の事先此教所と動さるり

急也

葉の事先此教所と動さるり

とて分たてたるや、葉の養和の

とて分たてたるや、葉の養和の

とて分たてたるや、葉の養和の

とて分たてたるや、葉の養和の

とて分たてたるや、葉の養和の

とて分たてたるや、葉の養和の

とて分たてたるや、葉の養和の

つらなるをみればけしきのたけ

後世のまじりぬるものなほ

是れをみればけしきのたけ

みよきこりて

かきつる花もやけしきも

みゆ

光るまじりぬるものなほ

みゆ

物の具は極ゆるけしきも

みゆ

略之傳

目とらしてうらむまじりぬるものなほ

みゆ

古戦場

まじりぬるものなほ

みゆ

下りぬるものなほ

原のまじりぬるものなほ

原のまじりぬるものなほ

まじりぬるものなほ

まじりぬるものなほ

柳かきくは後子候は

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

あはれしうきくは

その初上

初より十松年くく系小くく山

前篇

画變

而くくくくくくくくくくくく

致雨

業くくくくくくくくくくく

全

加くくくくくくくくくくく

忌世

同くくくくくくくくくくく

前篇

一くくくくくくくくくくく

長水

あくくくくくくくくくくく

忌世

とくくくくくくくくくくく

長水

筆くくくくくくくくくくく

前篇

くくくくくくくくくくく

忌世

入くくくくくくくくくくく

前篇

くくくくくくくくくくく

全

みこの初下

古山の物向仕とく雲の那
午暮

炬のくまきとくまきとくまき
水光

藤所の五人とくまきとくまき
全

南子とくまきとくまきとくまき
為那

程雲とくまきとくまきとくまき
長久

勢物のはとくまきとくまきとくまき
午暮

安座叢林待龍卷

鐘聲永徹三會曉

鐘とくまきとくまきとくまき
為那

文苑の五人とくまきとくまき
長水

冬夜集三級魚貫

天井とくまきとくまきとくまき
水光

紫烏やとくまきとくまきとくまき
全

かたはらとくまきとくまきとくまき
全

英の火とくまきとくまきとくまき
午暮

花のいろはのついで

花のいろはのついで
水

花のいろはのついで
花

花のいろはのついで
花

市中雪

花のいろはのついで
花

水自花々

花自紅

花のいろはのついで
花

花のいろはのついで
花

花のいろはのついで

花のいろはのついで

花のいろはのついで

花のいろはのついで

花のいろはのついで

花のいろはのついで

松の稚しほさう〜ぬつ〜

清の仙も志り〜ハ見ゆ

流し〜んや

志の若く志のこし〜稚の井のう〜り

年毎〜世と〜高き山の何れ〜く

何人〜を〜る所走れ大井川

人知〜所を〜る所走れ大井川

矢折の早〜方まじ〜皆を

志業

水元

空家

英也

つ〜ぬる女の志〜〜んや

年の年〜も〜れり〜んや

志ハ高士の志〜〜んや

志〜〜んや

木瓜の血貴〜〜んや〜〜んや

唇もあけお〜〜んや

白〜〜んや

巻の如〜〜んや

志業

享保十九年

甲寅 初夏

下栞原同明町

彫工

芥澤彦七

書肆

江戸日本橋通二町目

戸倉屋喜兵衛

啓
此
物
見

物見

此
物
見

物
見
此
物
見

此
物
見

此
物
見

此
物
見

此
物
見

卷之二

卷

卷

辛巳年